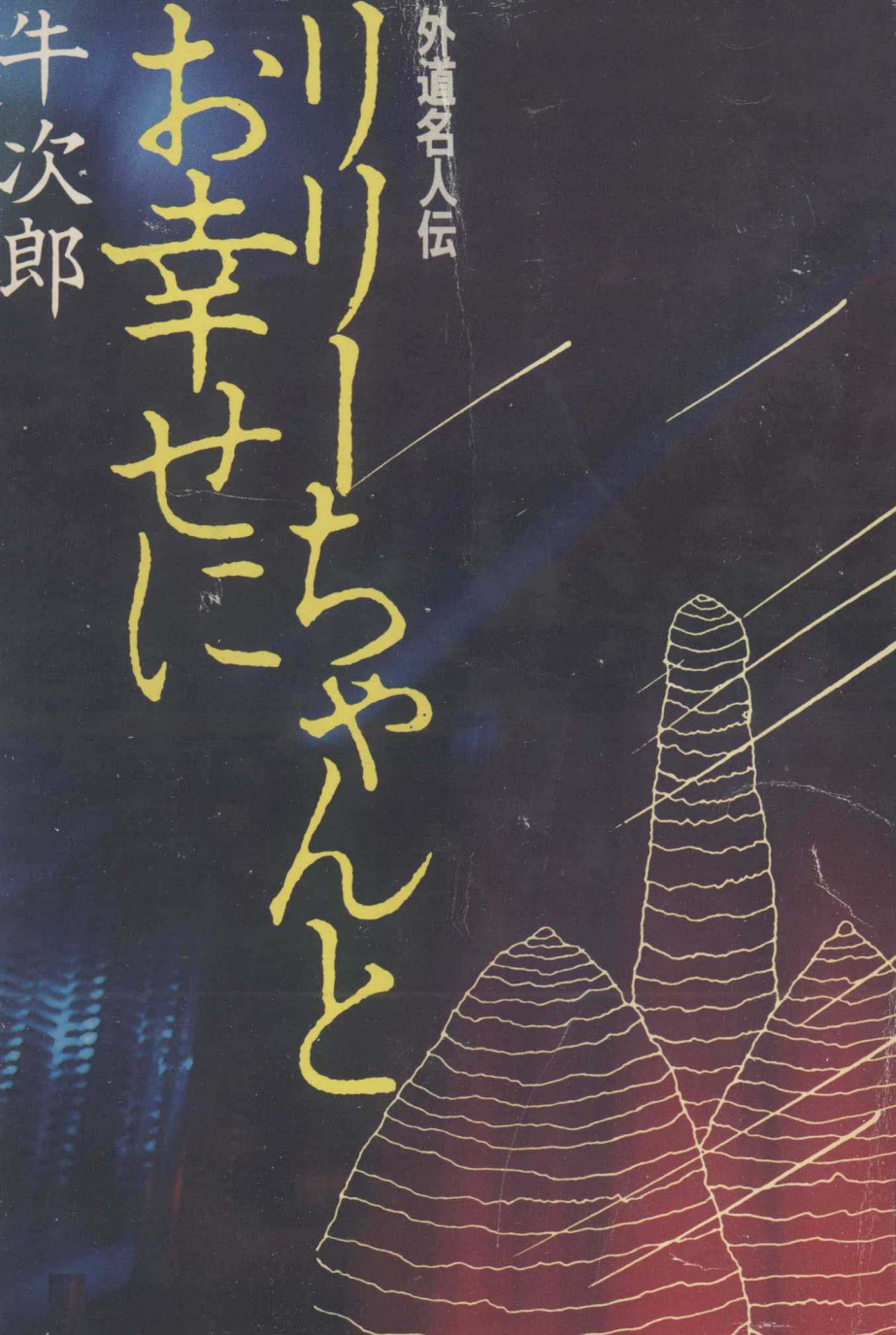
外道名人伝

リリーちゃんとお幸せに

牛次郎



外道名人伝

リリーちゃんとお幸せに

牛次郎

リリーちゃんとお幸せに
——外道名人伝
昭和五十七年二月二十七日　初版発行

著　者　牛次郎
発行者　角川春樹
発行所　株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二ノ十三ノ三　郵便番号一〇二
振替東京三—一九五二〇八　電話（〇三）二六五—七一一一
印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　株式会社宮田製本所
落丁・乱丁本はお取替えいたします
0093-872337-0946(0)

リリーちゃんとお幸せに

外道名人伝——目次

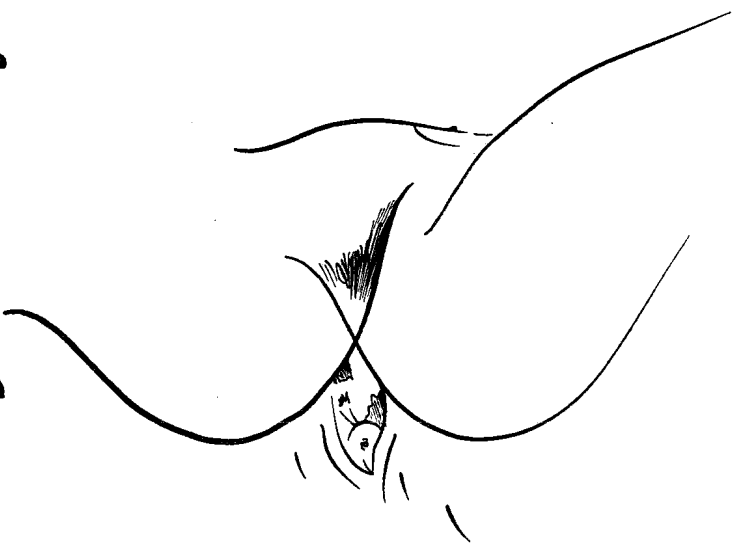
金魚、飛びなさい——5
家鴨が通る——37
リリーちゃんとお幸せに——71
ミラクルボール——101

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

梢の床 121
雪駄鳴らして 147
四ツ目屋裏表 181
あとがき 234

装丁　岡村元夫
イラストレーション　黒田征太郎
写真　荻原　明

金魚、飛びなさい



「どうしても、先生にお智恵を拝借したいんで」
と、水口の私の家に、新さんから電話が入ったのは、私が仕事に熱の入り始める夜中の一時頃であった。家人は、こんな時間であるから、すでに全員寝ついてしまっていた。電話嫌いで、直接電話口に出ることは滅多にないのだけれども、こういう場合では仕方がなく、
（締切りの催促ではないだろう）
などと思いながら、電話を取った。
受話器の向うから聴こえてくる声は、なじみのある声ではなかった。誰だろう、斟酌しているのが、相手に伝わったのだろう、
「小出ですよ。小出新助。判りませんか」
と、困ったような声を出した。それでも私には、相手が誰なのか、なおも判らなかった。こういう電話には一番閉口させられた。すると、小出新助と名乗る彼は、
「ナギサミュージックプラザでお遇いしているんだけど」
といった。この一言で、相手が判り、
「新さんかい。ストリップの」
と声の調子まであげて、思わずそういってしまった。いってから、

（ストリップといったのはまずかったかな）
と少し思ったが、新さんは、別に気にする風もなく、
「ええ、ストリップの新ですよ」
と笑った。何者か、判ってもらえたので、ほっとしている感じが伝わってきた。
新さんなら知りあいであった。しかし、小出新助というのが彼の名であるとは知らなかった。それに、知りあいとはいっても、一度しか遇っていなかったから、夜中の電話で、いきなり判れといわれても無理であった。
「夜中に、突然なんですがね。どうしても、先生に」
智恵を貸せというのだった。
新さんには、取材で世話になっていたから、
「私に出来ることなら」
と後日の時間の約束などをした。電話を切ってから、
（はて？）
と思った。ストリップに、私がどんな智恵を貸せるというのだろう。
新さんに、私が遇ったのは、劇画の新連載で、少々ポルノっぽいものをやることになったので、その取材のためだった。ナギサミュージックプラザに行き、いろいろと裏の話など聞かせてもらった。
新さんの話は、大変に参考になり、いつかお礼をしなくてはと思っていたところであった。
新さんが、裏の話を面白く聞かせてくれたのは、新さんとは、親しい麻雀仲間の、芸妓置屋分柳家のおかあさんが、一緒についてきてくれたお蔭であった。
分柳家のおかあさんは、五十年配になる気さくな人で、東北訛が抜け切らない言葉で喋った。少し

肥り気味で、しきりに糖尿を気にしていた。熱海で一番人出があるといわれている清水町の通りで、義姉が開いているケイ美容室の昔からの客で、以前は、自分も紋次の源氏名でお座敷に出ていたが、最近では、十数人抱えている芸妓たちの面倒で精いっぱいらしく、地方の仕事もやめていた。

私とも旧い知りあいで、二十年近く以前に、私が熱海のトップという洋食屋でコックをやっている時に知りあっていた。出前を運んだりしていての知りあいであった。

だから、二年半ほど前に、私の一人息子の正弘の小児喘息が原因で、東京の練馬から、熱海に引越してきた時は、私がまだコックをやっているとばかり思っていて、私の仕事が劇画の原作者だというのが信じられないようであった。

「へえ、マンガの先生かね。だって、あんた画が描けたっけ？」

「筋がきを作る仕事なの。画は漫画家が描くの」

「ああ、そう」

私の説明の何割が理解されたものか、

「じゃあ、矢っ張り画は上手だったんだね、たいしたもんだよ。マンガの先生ねェ」

と、それでも、まあ感心はしてくれていた。これ以上、漫画の創作上のことを説明してもらちはあかないようだった。

別の日に、義姉の恵子の店で、おかあさんに遇い、ポルノの取材のことをいうと、

「え？　マンガって、サザエさんみたいのじゃないの」

といわれ、ほとほと困ったが、劇画のいくつかを観せて、ようやく納得してもらい、

「それだったら、新さんに聞いたほうが早いよ」

とストリップ劇場、ナギサミュージックプラザに連れていってもらったのだった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

熱海には、温泉場らしく、何軒かのストリップ劇場があった。
ストリップ劇場とはいっても、日劇ミュージックホールのような訳にはいかない。せいぜい十五、六畳の部屋に、三十センチほど高くなった、二畳分ほどの舞台があって、客は、カーペット敷になっている床に屈み込む式の劇場であった。照明は、意図的になのか、不充分な明るさで、壁全体が黒地の布で被われていたから、穴倉のような雰囲気になっていた。どこの劇場も、似たりよったりの規模であった。新さんのところだけが特別に小さいのではなかった。
客は、殆どが観光客で、地元の者が観に来ることは滅多になかった。ワン・ステージ二十分のショーで、上演時間は一定していず、客が入ったら観せるのであった。
ショーといっても、舞台自体が二畳分くらいしかないのであるから、飛んだりはねたりは出来ない。もっとも客の方だって、そういう華麗なショーがお望みで来るのではなかった。いわゆる花電車が、売りものなのだった。女性の奥ゆかしき部分で、バナナを千切ってみせたり、笛を吹いたりしてみせるのだった。
別にタキシードを着た司会者がいる訳ではなかったから、踊り子たちは、
「では、今からバナナ千切りをお観せするかんね」
と自分で解説を加えつつ芸をご披露するのであった。
「よお、バナナよりも、フランクフルト・ソーセージでも千切れや」
客席から野次が飛んだりすると、
「莫迦だね、兄ちゃんも。ムスメみるとすぐにソーセージを連想すんだからァ。イメージが貧困なんだよ。さ、お客さん。今から一大ゲイジュツね。ゲイジュツを侮辱すると警察にいいつけるよ」
とテキヤの口上のように、ポンポンとやりあってショーを進行した。その度に客席に爆笑が起った。

分柳家のおかあさんと、新さんの劇場に行った私は、新さんの、
「とりあえず、舞台を観てやって下さいよ」
という勧めに従って、観光客の中に立ち混って、一大ゲイジュツ鑑賞をさせてもらった。
観ていると、確かにゲイジュツ的な芸で、まるで、そこに歯でも生えているみたいに、一本のバナナを四等分くらいに千切っていった。
(どんな訓練をするのかな)
と不思議であった。
「阿部定(あべさだ)みてえにょォ、とうちゃんのもチョン切っちゃえやあ」
と浴衣を着込んだ客から野次が飛んだ。
「何いってんだい。とうちゃんのはね、上の口でていねいに舐(な)め舐めしちゃうよ。何なら、兄ちゃんのチョン切ってやっか」
「よくいうよ」
「はい、お次は、お習字のお時間です」
と筆と半紙を取り出した。筆の柄の先端部五センチぐらいのところが、テープ状のもので、太く巻かれてあった。その太い部分をそこで咥(くわ)えると、半紙の上に中腰になってまたがり、腰を上手に使って、
「根性」
という文字を大書した。なかなかの達筆だった。観光客たちが、その書を奪いあって声を掛けたが、
「はい、先生」
と前列の端の方にいた私に、その書を差し出してきた。踊り子は、新さんから事情を聞いているよ

うであった。それで、書をくれたのだろうが、突然だったので、私の方が狼狽してしまった。客たちが、何の先生だといった風に、一斉に私の方を見た。どうにも照れ臭かったが、場内が暗いので、まだ救われた気になった。

つづいて、笛を吹いたり、ロウソクを立て、その火を吹き消したりした。

（あんなところから、本当に風が出るのか）

と思い、思い切って、踊り子に、

「どのくらい強い風が吹き出せるの？　俺の手に風をあててみて」

というと、踊り子は、私の手を、十センチ近くのところに誘い、手の甲に風を吹きあててくれた。フッという音がそこで鳴り、かなり強い風が当った。

「ほう」

と感心していると、

「訓練しだいで誰にも出来るのよ」

と真顔で答えてくれた。すると客の一人が、

「俺でも出来るかな」

と揶揄った。

「兄ちゃんは年中出してんだろう。今出すんじゃないよ、臭いから」

と踊り子は負けていなかった。

踊り子の、客との応対ぶりは、ものの見事で、投げつけられた野次は、鉄板で煎られた豆のように、投げた本人に、言葉を変えて、弾き返されていった。そこには、意外なほど、暗さがなかった。言い返す踊り子に、

「凄えなァ。よくいうよ」
と客がまたいった。
「商売だかんね。ゲイジュツで飯喰うの大変なんだよ。しかし、今日の客はケチだねェ。野次ばっか飛んで、銭が飛んでこないんだから」
踊り子をみていると、どんなに撓んでも折れることのない竹のようなしたたかさを感じた。しかし、したたかさは、決してずるさにはつながっていなかった。健康的な生をさえ感じさせた。体当りの強さなのだろうかと思った。
新さんのところには、踊り子が四人いた。四人には、それぞれ持ち芸があった。いずれも一大ゲイジュツであった。一人が五分ほどずつ演じてショーは終った。終ると、次の客が入ってきた。一人で来る者はなく、たいていが四、五人の団体だった。次の組は、浴衣を着ていず、全員、学生のように若かった。一人女性が混っていた。女性は、何の照れもみせず、興味津々に、踊り子のゲイジュツの部分に見入っていた。
私の興味は、その若い女性の方に向いた。
彼女を見ていると、時代のズレなのかなと思ってしまった。老け込みそうになる自分を思ったりした。
(しかし、女性が来るっていうのは、若さだけではあるまい。いくら今のヤングがドライだからといっても)
どうにも答えが得られなかった。混乱しかけていると、新さんが寄ってきて、
「こちらへどうぞ」
と小声で、舞台裏の小部屋に案内してくれた。

小部屋は、六畳ぐらいあって、グリーンのカーペットが敷いてあり、折りたたみ式の座卓が出ていた。座卓の上には、トースターが乗っていい、こうばしい匂いがしていた。

「いらっしゃい」

「ごめんなさいね。今、食事なの」

と三人の踊り子が会釈してきた。一人は、舞台で営業中であった。

小部屋には、楽屋という雰囲気はなかった。

「恵美ちゃんに、加代子さん。それにこっちが、うちの女房です。今舞台にいるのが、澄ちゃん、総勢で五人、細々とやってる訳ですわ」

と新さんが全員を紹介してくれた。

「新さんは、商売熱心だから。いつも入ってるねェ。儲かって仕様がないでしょ」

分柳家のおかあさんがいった。

「いやあ、早い時間のお座敷があるからやってけるようなもんですよ」

新さんは旅館の宴会に出張でショーを観せることをいってるのだった。

「先生ね」

とおかあさんが私にいった。おかあさんは、最近では、以前の呼び方ではなく、先生と如才なく呼んでいた。水商売に永年いる者特有の気の使い方が感じられた。私は以前呼ばれていたように「牛ちゃん」と呼ばれた方がいいのだが、先生という習慣的な呼ばれ方に異を唱えるのも変な気がしたので黙っていた。牛ちゃんというのは、私の本名が牛島で、獅子文六の「大番」がヒットしていらい、私をそう呼ぶ人が多くなった。牛ちゃんと先生という呼び方の異いに、照れ臭い引っ掛りを持った。

「新さんは、好い人だからね。旅館にも可愛がられて、結構、旅館からの紹介客も多いんでしょ」

「お蔭さまで。おかあさんたちの口添えが大きいんですよ。先生のマンガ、読んでますよ」
「そうですか、どうも」
「パチンコのマンガあったでしょ。あたし、あれ好き。あたしもパチンコよく行くから——喰べる？　パン」
「ええ、一枚」
断わるよりも、食べる方がうまくいきそうなので、イチゴジャムの塗られたトーストを恵美ちゃんから受け取った。
「遠慮なくやって下さい——おい、牛乳あったろ、出しなよ。あ、出番だな、いいよ、俺がやる」
と新さんが冷蔵庫のところに立った。新さんの奥さんも一緒に立ったが、彼女の方は、舞台のためで、
「すいません、ちょっと行ってきます——ねえ、あんた、ピンポンパン体操のレコード買っといてくれた」
「あ、忘れた。でもお前、あれもう古いよ」
「そうねェ、でも、あれ、のりやすい曲なんだもの……」
と次にかける自分の出番のシングル盤を、舞台の裏手にあたるところにおいてあるプレーヤーにのせた。そのプレーヤーのすぐ横が、舞台への出口になっていて、小部屋の光を遮断するために、黒いカーテンが二重に下っていた。
そのカーテンを分けて、澄ちゃんが舞台から降りてきた。降りてくると、すぐに赤い色の薄いパンティーをはきながら、テーブルに寄ってきて、
「厭な客。若いのにさ、すぐ触ろうとすんのよ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com